

## 分野番号1 高等学校 学習指導の部

### シラバスの作成と「総合的な学習の時間」の充実に向けた取組について

奈良県立法隆寺国際高等学校 教諭 加藤 宗弘

#### 1 実践内容

シラバスは、保護者に対して本校の教育内容・方法についての説明責任を果たすとともに、授業担当者が生徒に対して授業の進め方等について事前に説明し、生徒がより効果的かつ円滑に学習を進められるようにすることを意図して作成される。

昨年まで、本校のシラバスは、多くの科目で授業担当者と受講者と共有しているだけのものであった。この現状を改善するために、管理職の指導の下、定めた様式に従って各教科に記述してもらい、本年度4月中に学年ごとの冊子として作成することができた。

冊子としての作成は初めての取組であること、また学習指導要領の改訂期であることなどから、その記述の仕方や活用についていくつかの課題があった。それらを整理し、次年度のシラバス冊子作成に生かすべく、各担当者にその内容を周知した。

次年度のシラバスについては、10月中に第1稿が完成し、1月現在、最終稿の完成を目指している。各担当者へは、フォントなどの体裁を整えることだけでなく、各学期ごとに定期考査までの授業週数を踏まえ、科目ごとに授業時数のばらつきが出ないこと、新学習指導要領の趣旨を踏まえることなどをお願いした。

総合的な学習の時間については、「総合的な学習の時間検討委員会」や「教育課程検討委員会」など（以下、「各種委員会」という。）でその内容を検討し、教育課程特例校<sup>\*</sup>の対象である歴史文化科を除く3学科（各学年計7クラス）で以下に示すような取組を進めてきた。

第1学年では、平成25年度より県下一斉実施の「郷土の伝統、文化、自然等に関する学習」である「奈良TIME」を1年前倒しで実施できるよう、昨年度、各種委員会で、この学習の目標について共通理解を図るとともに、より効果的な授業のもち方について検討し、各教科独自の特色を生かしたテーマ設定をすることとした。本年度、国語科、地理歴史科、理科、保健体育科、芸術科（書道）、外国語科、家庭科の7つの教科で、それぞれの学習内容を開発し、7クラスに対してローテーションして実施している。

一方、第2・3学年ではそれぞれ「在り方と生き方を探る」、「人権と生き方を探る」をテーマの軸にして、現代の課題や自己の在り方・生き方などについて、一人一人が自己の問題としてとらえ、課題を主体的に解決していく資質や能力を育成することをねらいとして実施している。

特に、第2学年では、進路指導部の協力の下、地域と連携しながら「職場聞き取り調査訪問」（地元事業所39：内訳参照）を実施している。地元事業所の皆様の協力を得ながら、事前準備から実施、事後に至る取組の中で、徳性を磨くこ



#### 地元事業所の内訳

製造業社11 官公署10  
教育機関 9 金融機関6  
医療機関 3

と、すなわち社会人としてのマナーを身につけることを大切にしている。

また、第3学年では、第1学期に高大連携協定大学での授業体験を実施している。連携協定大学である奈良大学キャンパスで選択した講義を受講し、そこで得た経験を生徒が各自の進路決定に生かす。第2学期以降は、社会人になるために必要な知識やマナーを理解するとともに、人権意識を高める取組を進めている。

教育課程特例校<sup>\*</sup>：文部科学大臣の認定を受け、特別の教育課程を編成して教育を実施することができる学校

## 2 成果及び課題

シラバス冊子の作成については、学校評議員会においても「教育内容・方法を明確にするために大切な取組である」との評価を得たところである。次年度に向けて活用しやすいものとなっているかを生徒へのアンケート結果などを通して見直し、充実したものを作るとともに、活用できるよう広報したいと考えているので、ウェブサイト上に公表できるよう充実を図っていきたい。

第1学年「奈良TIME」についての成果としては、先生方から「身近な題材を教材としたことにより、興味・関心をもち、取り組んでいる。」「伝統文化を再認識し、先人の歩んだ姿を敬愛し、取り組んでいる。」「フィールドワークや実習に意欲的に取り組んでいる。」などの報告があった。また、準備に時間の余裕がないなどの課題があるが、今後、担当者を複数割り当てることで、内容の充実・継承を図ることを考えたい。また、歴史文化科の学校設定科目「斑鳩学」<sup>\*</sup>を他の学科に広げるためにも、この科目をまとめた内容での実施を計画している。

第2学年「職場聞き取り調査訪問」は、今年度で3回目の実施を迎える。生徒たちは日頃の授業にはない緊張感と気配りをし、事前に学習した内容を確認しながら取り組んだ。聞き取った内容からは、どの事業所でも仕事内容が多岐にわたること、いろんな苦勞があること等、様々な気付きがあった。今後、地域との連携の輪を広げながら、ご協力いただく事業所の開拓に取り組みたい。



第3学年で実施した大学の授業体験では、生徒たちは充実した施設・設備で、国文学、日本史、東洋史、地理学、文化財学、心理学、社会調査学、教養学などを受講し、「どの講義も理解できた」、「良かった」、「興味をもった」と回答した生徒が約8割いた。講義の専門的な内容に感動し展望をもつことができたようである。今後、各自の進路に応じた体験型の授業を企画していきたい。

「斑鳩学」<sup>\*</sup>：法隆寺国際高等学校が所在する斑鳩の里の現状と、地域に残る文化的・自然的遺産について、それらが形成されてきた政治・経済的背景や文化的特徴を学ぶ。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立法隆寺国際高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/horyuji-hs/index.htm>

## 1 実践内容

「桜花（さくら）に匂う吉野山、淵瀬（ふちせ）さやけき吉野川…」一校歌にも歌われているように、山紫水明の地で創立110周年を迎えた歴史と伝統を誇る本校は、農業科（森林科学科）、工業科（建築工学科、土木工学科）という専門学科から成り、それぞれ学科の特色を生かした学校づくりを進めてきた。情熱溢れる教職員と生徒・保護者、地域、関係諸機関等が連携した取組は、学習活動や生徒指導において積極的に実践されてきた。私も新任教員として平成4年に本校に赴任して以来、担任や部活動顧問（剣道部）として、また、平成20年からは生徒指導部長として、主題に掲げた取組を実践してきた。



### (1) 自信をもたせ、希望へとつなぐ生徒指導の実践

#### ① 本校生徒の現状

本校の生徒指導上の問題を抱える生徒の多くは、目標をもてなかつたり、目標をもつことから逃げようとする傾向が見られ、その根底には「自分自身に自信がもてない。」という状況があり、そのことが刹那的な言動を生み、問題行動へと走らせているのではないかと考えられる。本校では、こうした生徒たちに自信をもたせ、希望へとつなぐ生徒指導を実践することで「問題行動を生まない基盤づくり」と「自らの行動を正す力の育成」に取り組んだ。

#### ② 問題行動を生まない、問題行動が生まれぬ基盤づくり

社会の変化に伴って生徒や保護者の価値観が多様化し、かつて経験したことがないような状況・場面での対応が求められる場合がある。そこで、本校では、これまで継続的に行ってきた、生徒・保護者、教職員を対象としたアンケート調査（「規範意識」「喫煙」「いじめ」「携帯電話」「悩みや不安」「生徒指導の在り方」等）結果を基に、次の4つの内容に焦点を当て取り組んだ。

- ア 「ハインリッヒの法則」に基づく教職員の危機予測能力を育成することにより、問題行動の未然防止・抑止を図る取組の実践。
- イ 「割れ窓（ブローケンウインドウ）理論」を大切にした取組により、時機を逸しない適正な指導を展開することにより、係る問題行動の未然防止・抑止を図る取組の実践。
- ウ 「クライシス・コミュニケーション」を意識することにより、問題行動の初期対応や事後指導のまずさに起因するトラブルの防止・抑止を図る取組の実践。
- エ 教職員が経験談や失敗談を交えた「生きた言葉で心を伝える」取組により、生徒自ら改善しようとする意識を高め、行動する力を育成する取組の実践。

#### ③ 自らの行動を正す力の育成

本校では、「成功体験は生徒を変える」取組として「基本的生活習慣の確立」、「分かる授業の展開」、「進路指導の充実」に努めてきた。「基本的生活習慣の確立」では、欠席・遅刻・早退のない生活を送ることが、学校生活の充実だけでなく、進路の実現や規範意識の高揚にもつながり、落ち着いた態度で生活する生徒が増えた。

「分かる授業の展開」では、振り返り授業や基礎講座の充実はもちろん、専門高校としての特性を生かした実習にも力を入れており、この取組が、生徒の学ぶ意欲の喚起や自信につながり、自ら展望をもって行動できる生徒も増えた。「進路指導の充実」では、計画的に「自らの力で進路実現を図る」取組を展開し、その結果、資格取得や各種競技会・コンテスト等に積極的に参加する生徒が増え、進路決定率も大幅に向上した。このように、一人一人に夢や希望・目標をもたせる取組は、生徒が自分自身を変える力の源となることを実感する取組となった。



「課題研究」ログハウス製作風景

(2) 生徒とのかかわりから始まる生徒指導

授業でのかかわり、声をかけたりあいさつをするかかわり、部活動でのかかわり、時間をかけた保護者との連携によるかかわり、家庭訪問や面談を通してのかかわりなど、ありとあらゆる場面でかかわりをもつことが、生徒指導の始まりである。本校では、当番制で立哨と巡視による指導を毎日行っているが、その取組は登下校時だけでなく授業中や休み時間等にも広がり、教職員にとってはかなりの負担となっている。しかし、プロとしての自覚とプライドをもった教職員が一丸となって生徒とのかかわり、そこから見えてくる「生徒の心」に触れることで成果を上げている。

(3) 生徒の規範意識を高める集会と教職員の研修会

本校では、生徒自身が被害者にも加害者にもならない危機回避能力を身に付ける機会として、「生徒の規範意識を高める集会」を年4回実施している。本集会では、警察(サポートセンターを含む)や保健所、助産師、電話会社、薬剤師会等をはじめ、本校卒業生を講師とした講演会等を行うとともに、奈良県高等学校生徒指導研究協議会発行の「ホームルーム活動テキストわれら人間創造」を活用した、「人としての在り方・生き方」教育を展開し、成果も上がっている。また、教職員の研修会も積極的に実施し、その取組が知識だけに留まらず、実践力や対応力、応用力等の向上にもつながるよう、その内容の充実に努めている。



## 2 成果及び課題

以上述べた取組は、学級担任等の教職員個人としての力だけではなかなか成果がみえてこない。学年単位や学校全体の組織として教職員個々の専門性を生かした、組織的・協働的な生徒指導を推進する必要がある。総じて、これまで私は、生徒指導担当として組織力を活用した「あきらめない指導」「生徒が変わっていく様子を確認できる指導」「生徒が前向きな気持ちで落ち着いた対応をする指導」を心がけてきた。その結果、本校に入学したことをきっかけに新しい生き方を見つけ、充実した高校生活を過ごし、卒業時には全員が本校で学べたことを素直に喜び、涙している姿から、本校の取組は概ね成果を見ることができたと言えるかもしれない。しかし、依然として課題となる内容等もあり、引き続き、本校教職員の組織力を活用し、生徒一人一人の自律・自立を目指して、取り組んでいきたい。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立吉野高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/yoshino-hs/>

## 分野番号4 高等学校 部活動の部

### 部活動を通じた「良いところを引き伸ばし、人生を創る力を育む」指導

#### ～仲間とともに「夢」を「現実」に～

奈良県立御所実業高等学校 教諭 竹田 寛行

## 1 実践内容

### (1) 苦難を乗り越えて

私は平成元年に本校（当時、御所工業高等学校）に着任して、部員3名のラグビー部の監督を引き受けた。練習に使えるラグビーボールは無く、生徒と一緒にグラウンドに砂をまきながら、まさにゼロから出発した。そんな当時のことを振り返るとき、部員がいないことや道具に不自由したことよりも、ただ「ラグビーを教えられる」という新鮮な喜びに満ちた日々が思い出される。毎日のラグビー指導を通じて生徒とふれあい、何か変化があると純粋に喜びを感じることができたように思う。理屈ではなく、同じ時間や空間を生徒と共有することでいろいろなことを学ばせてもらったと思う。試合に負けたとき、選手たちが泣いて悔しがっているあの涙を勝利に変えるためには何をすべきか必死に考えてきた。彼らが流した悔し涙が、私に多くのことを教えてくれた。初めて奈良県高等学校ラグビー部顧問会議に出席したとき、「おまえ、部員3人で本気で花園、狙ってんのか!」と言われ、悔しくて情けなかった自分を思い出す。あの時の気持ちがなかったら、全国準優勝はなかったと思う。言葉にしる行動にしる、何か一つきっかけがあって自分を本気にさせ、あきらめずに目標を達成させようという気持ちを持続させることが、今日の結果につながったと思う。



### (2) 良いところを引き伸ばし、人生を創る力を

私は、夢とは近付けるものであり、掴むものだと思っている。毎日の練習を持続していれば必ずチャンスが来ると信じている。何故なら、今までのOBたちが多くの経験を通じて積み上げてくれた失敗や成功のマニュアルの上に、今の御所実業高等学校ラグビー部のスタイルができたからである。真剣に勝ちたいという思いを強く持ち続けること。そうすれば必ずチャンスが来ると今も信じている。



生徒目線を心がける試合後のミーティング

く態度を養い、言われたことだけでなく、自ら考え臨機応変に対応できる判断力)を私は重視した。

「本気」という言葉の中には「努力、協力、質素」という三つの要素が含まれている。その要素のバランスがとれたとき、初めて周りの人に認められ、チームも機能するものだと思う。

試合の勝ち負けだけでなく人格形成（純粋で素直に人の話を聞

私のこうした指導の柱となっているのは、部員を「リスペクト（尊重）」することであり、私の役目は、生徒個々の個性を引き出し伸ばすことである。「良いところを引き伸ばし、人生を創ってあげたい。前をしっかりと見よう。」と現在活躍している菊谷崇選手（トヨタ自動車ヴェルブリッツ所属、元ワールドカップ日本代表チーム主将）、大学選手権3連覇の立役者となった森田佳寿選手（東芝ブレイブルーパス所属、元帝京大学ラグビー部主将）などの数々のOB選手たちに言い続けた。



幸福になるには、結果だけでなくそのプロセスが大事だと思う。たとえ、優れた能力をもった人間が集まっても価値観を共有することができず、目的追求に対して同じ動きができなければ強い集団にはなれない。1人で為し遂げる夢もすばらしいが、仲間とともに力をあわせて為し遂げる夢には何とも言えない魅力を感じる。仲間とともに挑むものがあることで、一人一人がより高い能力を発揮できる。そういう意味で言えば、ラグビーというスポーツは、コミュニケーションのスポーツである。チーム内のコミュニケーションが確立した時、初めて全国制覇が達成できると確信している。人生を生きていく上で本当に大切なことは、周囲に目を配りつつ人の気持ちを思いやり、ムードを読むことが出来、多くの人たちと建設的なコミュニケーションを確立していくことではないだろうか。

## 2 成果及び課題

ラグビー部の指導を通じた生徒の育成が、挨拶などの規範意識の向上や清掃活動、学校行事における生徒の取組の活性化という形で学校全体にも広がっており、周りからも評価をいただいていることを大切にしていきたい。また、ラグビーを通じた地域での青少年の健全育成や市内の保護者との連携の他、市のスポーツ活動を通しての活性化にも取り組んでおり、多くの応援をいただいている。今後も学校内外での青少年の育成を大きな課題として、一層の努力を行っていきたい。

## 3 その他参考となる事項

全国高体連ラグビー専門部公式サイト <http://www.rugby-try.jp/index.html>

御所実業高等学校ラグビー部公式サイト <http://goserugby.wordpress.com/>

御所実業高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/gihs/>

## 1 実践内容

私は奈良県数学教育会や奈良県高等学校等教務研究協議会（以下、「教務協」という。）で、自分自身が何か特別なことをしたわけではない。歴代の会長先生や周りの先生方に助けていただいたことなので、実践発表というよりは、学ばせていただいた内容を整理して実践発表に代えたい。

### (1) 教務協で学んだこと

教務部長として、年間計画や教育課程編成などに携わっているときに、いろいろと考えさせられたり、悩んだりすることは多かった。そんなときに、教務協で他校の教務部長と情報交換をしたり、いろいろな話をしたりする中で助けられることが多かった。同じような立場で悩んでいることで共感し合えたり、違った視点で物事を考えるヒントをいただいたり、勉強になることばかりであった。また、協議した内容を「現場の声」として教育委員会事務局に届けたり、県や国といった大きなレベルで考えられている事柄を会員校に伝えたりするなど、教務協の果たす役割は大きかった。



教務協においては、平成17年度より理事長を務めた。会長先生方の指導・助言の下に他の先生方と進めた取組には以下のようなものがある。

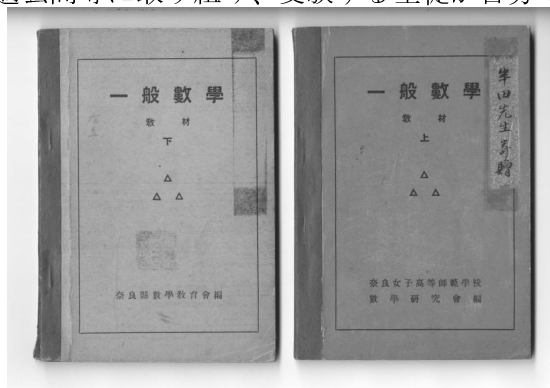
- ① 各校における教務上の懸案事項や情報の共有・・・各校の教務部長が困っていることや悩んでいることには共通することが多い。横の繋がりを強化し、気軽に他校に尋ねることが出来る環境作りを考えた。また、必要な場合は、県全体の動向を共有するためにアンケートを実施するようにした。ブロック会では研究協議にも時間をかけているが、胸襟を開いて情報を交換できるような運営を心掛けている。
- ② 高校入試制度や教育課程編成についての提言のまとめ・・・近年は、再編統合、入試制度改革、新学習指導要領の実施など奈良県の教育システムは大きく変化している。その中で、各校がより活力と魅力ある学校作りが出来るように情報交換や提言のまとめを行っている。自校のことだけでなく、奈良県の生徒をどう育てるのかという議論ができたことが大きかった。
- ③ 「成績処理プロジェクト」の実施・・・各校から早く共通の成績処理システムを開発してほしいという声が多く上がった。成績処理は、各校の担当者ごとで行われているため、担当者が異勤すると最初からやり直さなければならない。同じような処理をしているのに、学校ごとに処理システムが違うため、担当者の異勤があれば行き詰まってしまうなどの問題を抱えていた。これらの問題を解消するため、教務協としてのプロジェクトとして取り組むことになった。ほとんど服部先生（山辺高教頭）のご尽力で共通のシステムができあがっている。今後も各校の要望を取り入れて改良していく予定である。開発の過程で、いろいろな立場の学校が集まって設計できたことがとても勉強になった。成績処理は各校の「教育課程の理念」の出力部分でもあるので、設計段階で各校の様子がよく分かった。

### (2) 奈良県数学教育会で学んだこと

「数学のよさ」をどのように生徒に伝えるかを考えさせられた場である。普段は、授業研究や教材開発の大切さ、研修することの意義などを忙しさの中で忘れていたが、数学教育会の中では思い出すことができる。特に他府県の先生方の取組に触れる機会が多くあり、その実践に触れるたびにモチベーションが高まるのを感じた。このような体験を数学教育会を通して奈良県の先生方にも感じてもらえたらと願っている。

奈良県数学教育会において、平成12年度から部会長や幹事会の役員を務めた後、平成18年度から平成23年度までは、幹事長を務めた。先生方の協力の下、任期中に進めてきた取組には以下のようなものがある。

- ① 研修の重要性、楽しさの再発見・・・各校とも教員の高齢化に伴い研究が低調になっているが、各研究部が中心となって研究活動や授業力向上のための研修についての啓発活動を行った。また、近年増えてきた新規採用教員の指導のため「若手教員との交流会」を実施してもらっている。
- ② 他府県の数学教育研究団体との交流・・・研究や研修が低調なのは、他府県も同じであったので、他府県の先生方と交流することによって、良い刺激を受けて本県教育に役立てることができるよう合同研究会の設定を行った。研修で他府県の先生の研究を見聞することによって刺激を受け、励みとした。
- ③ 大きな視点で数学教育をとらえる・・・奈良県の数学の先生方との交流、小中の奈良県算数数学教育研究会の先生方との交流、近畿算数・数学教育研究大会や全国算数・数学教育研究大会で他府県の先生との交流などを通じて、「自校の生徒に数学をどう教えるか」→「奈良県の子どもに数学をどう教えるか」→「すべての子どもに数学をどう教えるか」というように、だんだんと大きな視点で考えていけば、最後は目の前の生徒にどう対応すればよいかも見えてくる。
- ④ 県一斉数学基礎学力テストや県一斉数学実力テストの改善・・・テスト処理委員会と幹事会の協力を得て、県一斉基礎学力テストにおいて毎年同様の問題を出題し、定点観測を行えるようにしてもらった。また、テスト実施前に各校で過去問等に取り組み、受験する生徒が自分の力を試すという意識付けを行えるようにした。また、テスト処理後の結果分析にもチームとして取り組み、各校の指導に役立てる分析資料を配布してもらっている。
- ⑤ 数学教育会の歴史に学ぶ・・・昭和20年代に奈良県数学教育会が発刊した教科書「一般数学」は奈良を題材とした数学の教科書であり、その内容は、現在の「数学活用」や「奈良TIME」を示唆したものが多い。現在もその内容を受け継ぎ、現代に蘇らせる研究が続けられている。
- ⑥ 数学の啓発活動・・・奈良県の子どもたちに数学のよさや素晴らしさをわかってもらうための「小冊子作成委員会」を立ち上げ、小冊子の作成に取り組んでいる。



## 2 成果及び課題

県全体のまとめ役をするようになって、文部科学省や教育委員会事務局の先生方の話や他校の先生方の話を聞く機会が増え、諸先生方の視点の大きさを実感することができた。自分の学校のことだけ、目の前の生徒のことだけを考えていたが、校外に出て外から見つめ直す機会を得て「奈良県の子どもをどう育てるか」、「県民の期待にどう応えるか」など考えることができるようになった。それまでは、「特色・活力と魅力ある学校作り」を狭い視野で考えていたのが、全体的に考えることができるようになったのが、私自身が一番成長できたことである。また、人の繋がりを大切にしていって、いろいろな方々の意見を参考にすることや、過去の事例に学ぶ姿勢を大事にすることを学ぶことができた。このような体験をひとりでも多くの先生にさせていただきたいと切に願う。

各校の状況は千差万別で、すべての学校に合う教育活動を開発するのは困難を極める。同様に先生方の考え方も人それぞれで、すべての先生が満足できる取組をするのは困難である。その中で、いろいろな取組に着手できたのは、「目の前にいる生徒のためになることなら、がんばってみよう」という先生方の熱い思いがあったからこそである。やらなければならない課題は山積みであるが、先生方の熱い思いを糧にして解決していきたい。

## 3 その他参考となる事項

奈良県数学教育会ホームページ <http://naramath.web.fc2.com/>  
 奈良県数学教育会会誌